

私の歩んだ研究の道とそこからの教訓②⑧

私を育てた出会いの数々

小 田 慈*

はじめに

2015年3月に岡山大学を“無事”定年退任をしてから、はや2年目に入ってしまった。思い返せば、約40年間（学生時代をいければ45年間）にわたって、岡山大学鹿田キャンパス（医学部、大学院医歯薬学総合研究科/保健学研究所、大学病院）を生活の基盤としてきたこととなります。大学から離れたのは、高松市にある香川県立中央病院に勤務した4年間のみでした。臨床が好きで小児科医を目指した私が、こんなに長い間、大学生活を送るとは、夢にも思っていませんでした。岡山大学で臨床、教育そして研究に携わった間には、その後の私の生き方に影響を与えたさまざまな出来事、そして多くの出会いがありました。

その一つ一つが走馬灯のように思いだされます。マイルストーンを振り返ってみたいと思います。

I. ノイヘレン、そして香川県立中央病院での4年間

私が卒業した当時は研修制度というものはなく、母校の自分が入りたい医局に入局するのがごく普通の選択肢でした。小児科医であった父の影響もあったのか、私は迷うことなく、木本浩教授が主宰されていた岡山大学小児科に入局しました。学生時代には、医学部というより軟式庭球部といわれるほどクラブ活動に熱中し、国家試験も発表の日まで落ちたと思っていた私にとって、木本教授の総回診、太田原俊輔先生（後の岡山大学小児神経科教授）の神経回診は魔の時間帯でした。

抄読会では喜多村勇先生（後の高知医科大学学長）から、なにやら難しそうなの、しかし知らないかと答えたら、「君は勉強が足りん！」と一括されそうな質問が飛んできます。脇口宏先生（現 高知大学学長）から教えを受けた腰椎穿刺にかかわるエピソードは忘れられない思い出の一つです。時間があつという間に過ぎていきました。

臨床所見をしっかりとること、少しでも辻褄の合わないことや疑問点があれば放置しないこと、一つ一つの事実を大切にすること、診療録をきちっと書くことなど、思い返せば医師・研究者・教育者としての原点を教え込まれた、とても大切な1年間でした。

そして昭和52（1977）年4月から4年間香川県立中央病院小児科に勤務し、後に高知医科大学小児科教授になられた倉繁隆信部長、そして現役のまま消化器がんのためにお亡くなりになられた尾崎寛先生から、小児科臨床をみっちり教え込まれました。倉繁先生は、いい意味での親分肌、男気のある先生で、感化を受けた私は倉繁先生の診療スタイルを、ずっと目標にしてきた気がしています。倉繁先生は、難治性の感染症や白血病の患児が入院してくると、「最新の、ちゃんとした論文を読んでこい。治療はお前に任せた」といって、いつも私を主治医に指名されました。高松での4年間は臨床に明け暮れた、最も小児科医らしい毎日を過ごした時期だったように思います。そして、その時間の流れのなかで、私が将来、小児科専門医として選ぶサブスペシャリティが自然に決まっていきました。倉繁先生の指導の下で、当時大きな話題を集めていた白血病と水痘の院内感

* 岡山大学特命教授/名誉教授
〔〒700-8558 岡山市北区鹿田町2-5-1〕

染, Reye 症候群の症例発表などが私の学会デビューでした。

Ⅱ. 岡山大学小児科への帰局～臨床, 研究そして, 清野佳紀先生との出会い

昭和 56 (1981) 年 5 月に帰局後は, 当時の 6 研 (第 6 研究室: ウイルス研究室) に属しましたが, 試験管を振ることよりも小児の血液・腫瘍性疾患, 特に白血病の診療に夢中になっていました。論文もあまり筆が進みませんでした。ノイヘレンのときに経験した何人もの白血病患児の死, そして香川県立中央病院での患児・家族との交流体験が, 私を小児がんの世界に引きずり込みました。

がんの子どもたちを救いたい, そのなかの一つのテーマに感染症, 特にヘルペス属ウイルス感染症の克服がありました。EB ウイルス関連抗体価の異常な高値が続き, 全身のリンパ節腫脹を繰り返し, 最後はホジキン病を発症した症例を経験しました (今思えば, 当時まだ疾患概念が確立されていなかった慢性活動性 EB ウイルス感染症です)。そして, なぜ免疫不全状態や新生児でヘルペスは重症化するのだろうかとの思いから, せめて学位論文はと, ウイルス学教室 (新居志郎教授, 現岡山大学名誉教授) に出入りさせていただき, 新生児における単純ヘルペスウイルス感染症の重症化の機序に関する研究に取り組んだのは帰局して数年たった後でした。当時, B 型肝炎母子感染予防ワクチンの臨床研究中であったことから, 臍帯血, 新生児～乳児期の肝炎ウイルス抗原・抗体チェックのために採血された余剰検体を用いて, 単純ヘルペスウイルス感染細胞に対する ADCC 活性, NK 活性を月齢ごとに検査・検討を行いました。半日以上かけて処理し, やっと 96 穴マイクロプレートに撒いて, さあ⁵¹Cr 測定と思ったとたん, 床にこぼれていた汚水に足を滑らせ検体を没にしてしまい, 泣きそうになった夜もありました。

できあがったつむりの論文を木本教授に校閲していただくと「君の日本語はなっとらん。主語と述語が減茶苦茶だ。てにをはをもっと勉強しなさい!」のお言葉とともに, 真っ赤になった原稿が何回も返ってきました。この厳しい指導のおかげで私の文章力は形成されたと, 今でも心から感謝

しています。恐らく現在の若手の先生方が論文を執筆された後, 主任教授の部屋で立ったまま何時間も指導を受けながら校閲を受けるという経験をされる機会は, まずないのではないのでしょうか。時代が変わったといってしまうそうですが, 当時の木本教授の姿は指導をするものはかくありきと教えてくださったように思っています。

また, ある東京での学会の夜, 当時すでに高知医大の教授だった倉繁先生, そして助教授だった脇口先生からホテルの一室で, なんとなく大学生生活を送っていた私に対して「お前は大学で何をしているんだ, 論文も書かずに, 大学にいる資格はない! 甘えるな!」と夜を徹して叱責を受けたことも懐かしく思い出されます。後輩のことを心から案じてくれる素晴らしい先輩にも恵まれました。

このような時の流れのなかで, 平成 2 (1990) 年 3 月に木本教授は退官され, 同年 4 月, 大阪大学から着任された清野佳紀教授との出会いがありました。

平成 2 (1990) 年 4 月 1 日は, 私の生涯のなかで最もインパクトの強かった 1 日の一つとなりました。この日以降の小児科学教室の変革は, 革命といってもよかったです。とにかく無我夢中で原点に戻り, 頑張った記憶があります。自分の限界を感じ, 心が折れそうになったこともありました。臨床, 研究そして教育すべての面で清野先生から要求されるレベルは, とても高いものがありました。「論文は全部, 英語で書け!」, 「研究費は自分でしっかりとってこい!」, 「狭い日本, そのまた狭い中国四国, そしてそのなかの小さな岡山, よく考えてごらん, 岡山, 岡山といつて, どんな意味がある。世界のなかで考えろ」, 「小児科という狭いなかにももっているのはだめだ, 内科と対等に勝負をしろ!」, などなどの檄が毎日のように飛びました。

長い間, 試みたくてもできなかった造血細胞移植も, 清野先生着任後, すぐに準備にとりかかることが許され, 7 月には第 1 例を実施することができました。難治性神経芽腫症例への自家骨髄移植でした。その後, あつという間に同種骨髄移植, 末梢血幹細胞移植, 臍帯血移植へと進み, 現在で

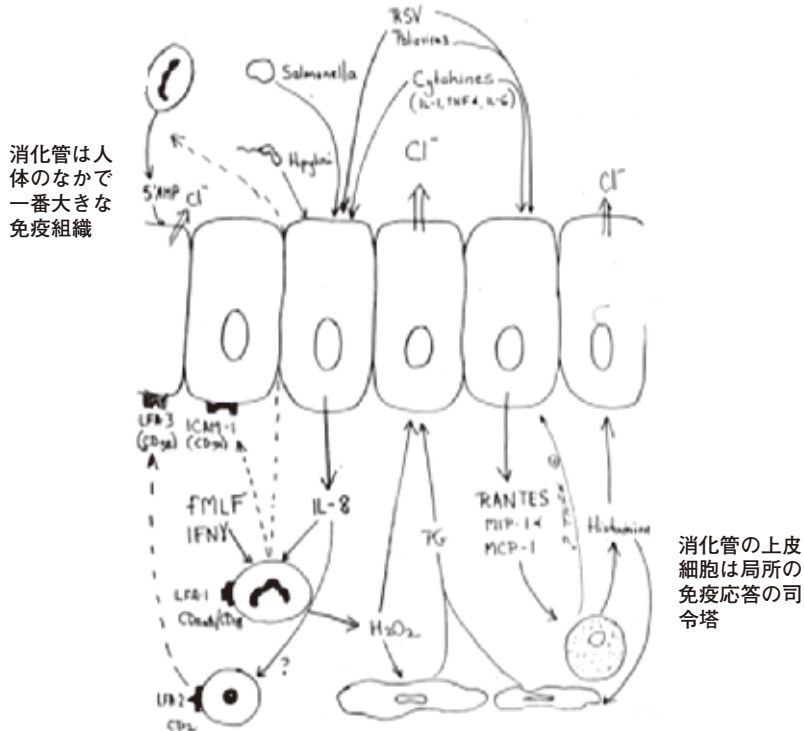


図 テキサス大学ガルベトン校小児病院 CHRC での消化管免疫についてのディスカッション (Sheila Crowe MD 作成)

は岡山大学病院小児血液・腫瘍科は西日本における主要な造血細胞移植施設となりました。ウイルス研究室は免疫・腫瘍研究室、あるいは血液・腫瘍グループと呼ばれるようになり、グループのチーフとして、自分のみならず後輩たちをまとめ、指導していく立場に立たされました。岡山大学での生活のなかで一番、精神的にも肉体的にもきつかった時期かもしれません。

III. 米国留学、さらなる新しい出会い

この嵐のような毎日のなかで、ほっと一息ついたのは 1993~1994 年の米国留学だったように思います。テキサス大学ガルベトン校小児病院では Pearay Ogra 教授 (日本小児感染症学会理事長堤裕幸先生の留学時のメンターでもあります) の下で、消化管の粘膜免疫に関する研究に携わりました。Lab のメンバーたちと過ごした楽しい毎日は忘れることができません。私は高校生のとき、AFS (American Field Service) 交換留学生とし

て 1967~1968 年にコロラド州デンバーのアラメダ高等学校に留学・卒業した経験がありました。そのためか、ガルベトンでの生活にさほど不自由はありませんでした。むしろ、アメリカ南部の southern hospitality はなんとなく性に合っているとすら思っていました。

テキサス大学ガルベトン校小児病院では、CHRC (Child Health Research Center) の客員研究員として、基礎医学者 (Mucosal Immunology が専門) の Peter Ernst 助教授、彼の妻である Sheila Crowe 講師 (消化器内科医) とチームを組み、ポリオウイルスなどのウイルス、サルモネラなどの細菌に対する消化管粘膜での白血球とケモカインネットワーク (図), 電気生理学的手法を用いた消化管粘膜細胞と好中球のインターアクションによる消化管粘膜細胞の細胞膜透過性の変化、ピロリ菌と消化管粘膜細胞との免疫応答などの基礎的研究に従事し、Experimental Biology, Annual meeting of Mucosal Immunology など、何

回か研究発表を行いました。留学を経験された方はきっと皆そうだと思いますが、研究生活も楽しかったのですが、何よりもそこで知り合った人々と過ごした時間、そして、そこで作った思い出が何よりも貴重な人生の宝物の一つになっています。

IV. 保健学研究科への転籍と小児保健

1994年夏に帰国後は小児科学教室医局長、助教授を務めた後、平成12(2000)年、新設の医学部保健学科教授に清野先生はじめ、医学部関係者の先生方から推挙され〔平成14(2002)年8月に大学院医保健学研究科教授に配置換〕、岡山大学生活で初めて正式な所属が小児科から変わることになりました。

保健学科・保健学研究科では面食らうこともありました。チーム医療の大切さ、多職種連携の大切さ、さらに病気を治すことよりも病気になる健康な社会を作り出すことの重要さをより強く感じるようになり、医学科と保健学科の架け橋になればということを一義とし、職務を果たしてきました。何よりもそれまでやりたくても時間的に難しかった小児保健(ワクチン関係、感染症、小児がん関係などのフィールドワーク)に関する研究に取り組み、学生たちの若い力と感性を感じることのできる毎日は、とても楽しいものでした。

“小児保健”の重要性、振り返れば、香川県立中央病院小児科在職中の1970年代後半にすでに私の心に入り込んでいたように思います。当時私は2回にわたって、厚生省平山班(班長 平山宗宏東京大学教授)の一員として沖縄の離島の乳児健診団に参加させていただきました。2週間にわたる離島(石垣などの八重山諸島、宮古島、西表島など)での乳児健診活動と、地元の方々との交流は本当に天国にいるようでした。このとき心に抱いた“今は病気を治すことに夢中になっているけれど、本当は子どもたちが病気になる、健康な一生を送ることができることに取り組むことのほうが大切なんじゃないかな”という思いは、その後の私の医師、研究者としての心の大きな背景の一つになっています。平山先生には、以来、ずっと懇意にさせていただきました。

母教室である小児科との連携、小児科スタッフ

の方々への支援も継続的にいただきました。保健学研究科への転籍後も、ずっと岡山大学病院での診療や臨床カンファレンスへの参加は続けることができました。感謝してもしきれない気持ちでいっぱいです。

V. 多施設共同研究、学会活動、教育、管理運営へ

1990年代以降、わが国における小児がん、特に白血病などの血液悪性腫瘍の治療成績の改善は目を見張るものがあります。この背景にあったのは、科学性・倫理性に基づいた多施設共同臨床研究の推進でした。それまで、“俺が、俺が”でなされてきたわが国における臨床研究を欧米と肩を並べ、さらに追い越すものにするためには、全国の専門施設が協力して、national studyを可能とする組織作りをしないといけない、日本の小児がんの子どもたちのためにも、という思いが、ちょうど私たちの年代の小児がんを専門とする中堅(当時の)小児科医の間で急速に盛り上がってきました。皆、研修医、大学の医員、あるいは助手時代から大学の枠を越えてつき合ってきた仲間でした。この流れのなかでJACLS(Japan Association of Childhood Leukemia Study)、JPLSG(Japan Pediatric Leukemia & Lymphoma Study Group)、JCCG(Japan Children's Cancer Study Group)などの多施設共同治療研究グループの結成と活動に関与でき、小児の難治性白血病や固形腫瘍の分子発生病態の解明・予後因子の解析などの基礎・臨床研究を通じ、わが国における標準的小児がん治療プロトコルの開発などに携わることができたこと、さまざまな小児疾患における患者・家族の生活の質、長期フォローアップ、成人診療科へのtransitionに関する研究など、いくつかの研究プロジェクトや専門医制度の整備など現代の医療制度、医療体制の問題についてかかわることができたことは、とてもラッキーであり、大学に勤務する医師・教育者・研究者としての充実感を味わうことができました。

小児感染症学会においては監事や理事を務めさせていただき、研究・教育委員会委員として、森内浩幸委員長の下、若手医師のための夏季セミナーのチューターとして、毎回、全国の小児感染

症学会の明日を担う若手医師の方々と楽しいひと時を過ごすことができました。平成 27 (2015) 年は定年後にもかかわらず“若手医師のための夏季セミナー in 瀬戸内”を、塚原宏一教授はじめとする岡山大学小児科のメンバーの力を借りて開催させていただきました。

おわりに

私に大学生生活とは何かということを教えていただいた清野先生は、大学院大学となった岡山大学の初代の歯学総合研究科研究科長を務められた後、2003 年に大阪厚生年金病院院長となられ、岡山大学を去られました。恩師と職場を異にするということはとても辛かったですが、ここにきて初めて独り立ちをしたような気持ちになりました。

平成 23 (2011) 年 4 月には医学部副学部長、同年 8 月には大学病院に新設された小児血液・腫瘍科の科長/教授を当時の森島恒雄教授、槇野博史病院長のご尽力により拝命し、平成 27 (2015) 年 3 月に退任の日を迎えました。

岡山大学での 40 年をあらためて振り返ってみると、多くの先輩、同僚、友人、後輩、そして病気を患った子どもたち・家族との出会いがありました。臨床・教育・研究という三重苦? のなかで得た一番大切な教訓、それは“人との出会いと交流”そして“継続”だと思います。自分一人では何もできません。20 年以上前の米国留学の際に感じた、“一人、一人の能力では決して負けていない、だけど組織、チームとしてはオートメーション化された工場と家内工業くらいの差が…、このことに気がついて何かを変えなければ、日本は…”という思いは間違っていないと思っています。何よりも、一人一人との出会いを大切にし絆ができていけば、臨床場面で困ったとき、研究で行き詰ったとき、自分の進むべき方向で迷ったとき、必ず助け合うことができると信じています。

言い古された言葉ですが、やはり“継続は力”だと思います。そして臨床医として研究に携わるのであれば、これも言い古されていますが、“bed side から bench work, bench work から bed side へ”だと思います。日々の何気ない臨床のなかに研

究のテーマが隠されていると思います。自分の経験した症例の問題点を、あるいは疑問点を注意深く掘り下げていくことが新しい知見を得るためには大切だと思います。あるいは、小児がんの予後の改善をもたらした多施設共同治療研究のように、エビデンスを得るための N 数や期間をきちっと統計学的に算出し、計画的に臨床研究を進めていくことも重要だと思います。研究のための研究では意味がなく、臨床医が行う研究は基礎的、臨床的研究にかかわらず、必ず臨床にフィードバックすることができ、病に苦しむ子どもたちのベネフィットにならなくてはなりません。

2015 年 3 月岡山大学定年退任後は、難波正義元岡山大学医学部長(新見公立大学 前学長)のお世話により、新見公立大学特任教授/保健管理センター長を務めながら、岡山県北部の小児科医不足を補うべく新見中央病院小児科診療のお手伝いをさせていただいています。長年、心の片隅にあった“普通の小児科のお医者さん”として生涯を全うしたいと思っています。

日本小児感染症学会のますますの発展と、お世話になりました先生方、そして未来を背負う若手の先生方のご健勝を祈念いたします。長い間、大変お世話になりました。ありがとうございました。

略歴

1968 年 6 月	米国コロラド州デンバー市アラメダ高等学校卒業
1969 年 3 月	鳥取県立鳥取西高等学校卒業
1970 年 4 月	岡山大学医学部医学科入学
1976 年 3 月	岡山大学医学部医学科卒業
4 月	岡山大学医学部小児科学教室入局 岡山大学医学部附属病院小児科研修医
1977 年	香川県立中央病院小児科医師
1981 年	岡山大学医学部附属病院小児科医員
1983 年	同上 助手
1991 年	同上 講師
1993~1994 年	米国テキサス州テキサス大学ガルベトン校小児病院留学
1999 年	岡山大学医学部小児科 助教授

2000年4月	岡山大学医学部保健学科 教授	2015年3月	岡山大学定年退職
2002年8月	岡山大学大学院保健学研究科 教授	4月	岡山大学名誉教授/岡山大学特命 教授
2011年4月	岡山大学医学部 副学部長		新見公立大学特任教授, 保健管理 センター長
10月	岡山大学病院小児血液・腫瘍科 科長		

* * *